

HFHJ Newsletter

ハビタット・ジャパン ニュースレター

第7号 2007年7月発行

ソロモン諸島被災者支援初動調査

2007年4月2日午前7時40分ころ、南太平洋のソロモン諸島でマグニチュード8.1の地震が発生し、その後、大規模な津波が押し寄せました。ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンでは、ジャパン・プラットフォームの助成を受け、ソロモン諸島における地震被災者支援のための初動調査を行いました。



ギゾ島ピンボロ村の被害状況

まず首都ホニアラで政府関係者などから情報を収集し、その後、震源地近くで被害の最も大きかったギゾ島に行きました。ギゾ島ではまず、オックスファム・ソロモンの職員の方の案内で、被害のひどかったチチアナ村、ニューマンダ村、ギゾ市内の官舎地区と避難民キャンプを訪問しました。それらの村は津波により全壊していました。さらに、小さなボートでヴォリヴォリ村、ピンボロ村、パイロンゲ村、シンボロ村など海からしか行くことのできない被災地域を訪問しました。

ソロモン諸島の伝統的家屋は元々高床式で木や葉っぱでできています。被災した地域は、海辺には椰子などの木が少なく、ほとんどの住居は直接海辺の砂の上に建てられていました。また、土台となっているポールにははりが施されておらず、さらに家部との接続が十分ではありませんでした。このような点が今回の地震、津波で多くの家屋が被害を受けた理由としてあげられます。

住民は津波の恐怖からトラウマが依然解消されず、災害後1ヶ月経っても山の上でテント生活をしていました。テント生活では、感染症の蔓延が懸念されており、また、女性や子どもの安全な生活スペースの確保が難しい状況です。生活のほとんどをソロモン政府や国際NGOからの物資の配給に依存しています。学校も再開されておらず、子どもたちはNGOなどの作成した安全な遊び場で遊んだり、学んだりしていました。

多くの被災者は津波の恐怖から山の上での生活を望んでいました。しかし、元来、生計の手段は漁業であり、中には海岸沿いに戻ることを望む声もありました。政府と住民の話し合いが始まり、ソロモン政府は確実に権利のある元の土地に戻ることを勧めていました。

住宅の再建は、生活の安定をいち早く取り戻し、生計の再建に専念させるために重要な課題です。ソロモン政府も最

重要課題としていますが、いち早い支援が望まれています。

被災民へのインタビューより

ギゾ島ヴォリヴォリ村のノマさんの家は流されてしまいました。土台のポールだけ残っています。地震が起きた時、外にいて、大きな波が見えたので、みんなで逃げたそうです。今は怖いので山に住んでいたいと言っていました。ノマさんのお父さんは海の近くに住みたいけれど、怖いから今は山の方に住んでいたいと言っていました。

また、シンボロ村のゴラさんはボートをなくし、漁にでれないと嘆いていまし



ゴラさんの家はここにあったが...

た。やはり今は怖いので山の上の方に住みたいそうです。椰子の実を町で販売していましたが、売ることができなくなり、収入がなく、困っているとのことでした。

(国際事業部 西島 恵)

ハウス・サポーター・プロジェクト

バングラデシュで建築開始!

ハウスサポーターの皆さんの多大なる協力により、4月に9軒分をバングラデシュに送金いたしました。5月初め、ダッカのナショナルオフィスのスタッフは支援先であるジェソール県を訪れ、ホームオーナーに会い、建築の準備を始めました。ジェソール県ではモンスーンの雨による洪水で多くの人が家を失っています。多くの家は竹や木、草屋根でできており、強い雨や洪水に弱い家です。定期的な収入がない人々にとって災害に強い家を建てることは難しいのです。

今回は3月に行われたバングラ救援チャリティお花見での支援先であるウタムさん一家を紹介します。

ウタムさんは小さな家



に、妻のパルボッティさんと、三人の娘、そして年老いた母と住んでいます。その家は、竹の壁にブリキの屋根、土間でできています。一部屋しかなく、ベランダに屋根はありません。雨期になると、雨水が屋根と壁から漏れ、家はひどいダメージを受けてしまいます。

ウタムさんは理容師で、妻のパルボッティさんは籠を編んでいます。その収入は新しい家を建てるのには十分ではありませんでした。ウタムさんは、「新しい家ができたならその家で床屋を営むよ。とても楽しみだよ。その方が店の賃料も払わずに済むから貯金にもなるしね」と言っています。ウタムさんは、ハビタット・バングラデシュ支部の「セーブ&ビルド(貯金&建築)」メンバーです。家族は新居への引越しをととても待ち望んでいます。

*今回建設中の9軒のホームオーナーの方々は以下の通り。

◇カルティック・シャーカーさん◇リボン・シャーカーさん◇ウタム・シャーカーさん◇シュディール・ダスさん◇シクハ・ダスさん◇アシム・シャーカー・パスターさん◇アナス・ダスさん◇アマール・ダスさん◇アシム・ダスさん



2007年春期 GVリポート

(青山学院大学 SHANTISHANTI チームリーダー 芳野 翔)

今回、タイの首都であるバンコク市の郊外、宿泊場所から車で一時間ほどの場所で住居建築活動を行ってきました。バンコクは交通量がとても多いためにしばしば渋滞に見舞われ、予定していた移動時間よりも長かかってしまうことが多々あった為、臨機応変な対応を求められました。

現地では土台作りから始め、セメント作り、それに伴う材料である砂や石運び、ブロック運び、壁作りが主な作業でした。現地のスタッフ、家族、近所の人達、私たちボランティアでの共同作業でしたが、最初のうちは、言葉も上手く伝わらないため時間を要しましたが時間の経過と共に簡単なコミュニケーションを通じていくつもの笑顔がうまれました。別れの時には現地の人々、私たちボランティア皆が涙を流して別れを惜しむほどの仲になりました。単なる建築作業だけでなく、共同作業を通じての「絆」を得ることができました。

また、建築活動以外にはスラム街の孤児院、タイの王宮、エレファントショーなどを見れるバンコク郊外の動物園を訪れました。孤児院では、一見華やかに見えるバンコクという都市の裏側を垣間見ました。宿泊施設ですが、私たちが宿泊したのはユースホステルだったのですが、バンコク市内でもセキュリティ、フレンドリーさでユースホステルの中でもトップ10にはいるユースホステルとして認められている場所でした。近くに日本人街があったために治安が良いというのも安心できましたし、車ですぐの所に病院があったのも心強かったです。また、ユースホステルという場所柄、宿泊していた12日間の間に沢山の旅行者が訪れ、ドイツ、オーストラリア等といった世界各国からの旅行者とのちょっとした国際交流の場所となっていました。住居建築活動はもちろんのこと、それ以外にも様々な発見や出会いなどを通じて得られる「モノ」がGVプログラムの醍醐味ではないかと感じました。

所属	Shanti Shanti 2 (青山学院大学)
訪問先	タイ、バンコク
サイト情報	HRC-Central, Bangkok Project Site 鉄筋コンクリートとブロックによる平屋一戸建て
活動日程	13日間:2007年3月10日(土)～3月22日(木)
メンバー	計:14名(大学男性:7, 大学女性:7)

タイ インターン報告、「働く」って何だろう。

(清水 慶子)

インターンは正規職員とボランティアの中間のような存在。給与はもらわないけれど、限りなくスタッフと近い仕事を任せられる。単にお手伝いをするだけではなく、実際の業務に携わりながら、何をすべきかを考え、実行し、間違えば修正しながら、責任を持って結果を出すことが求められます。仕事と学びの両方を経験できる、貴重な時間です。

エキサイティング！

日本人の先任者も同僚もいない、まったくのフロンティア。「最前線」という響きはすごくカッコいいですが、それはあらゆることを自分で始めるということ。日系企業への営業を例に挙げれば、どの企業にアプローチすればいいか、どのような書類を作ればいいか、相手先が求めている情報は何か、コンタクトを取り続けるにはどうしたらいいか、魅力的なプレゼンをするためには何をしたらいいか等々を自分で考え、即実行するという作業の繰り返しです。あらかじめ敷かれたレールがないから、頼りになるのは自分自身。状況を的確に判断し対策を講じる力や粘り強い努力が求められます。

チャレンジング！

ハビタット・タイだけにスタッフはほぼタイ人、飛び交う言葉もタイ語です。本当に彼らが求めていることを察し、理

解するには英語でのコミュニケーション以上に、タイ語での係わり合いも重要。毎日ひとつひとつ積み重ねるように、新しい言葉を身につけています。「サバライ(気楽に楽しく)」が文化の基本にあるこの国で仕事をこなすことは、私には



大きな学びです。

私の役職はJapanese CSR Officer、相手先は全て日本人、日本社会。そのせいか、情報もより精密、より具体的なものを提案することが求められます。また私自身も「せっかくだけにタイまで来たんだから、何か成果を残したい！」と強く望んでいる所があって、気づくとキリキリ焦って空回りしていることもしばしば。でも、これも含めて国際協力なんだと思う。異なった背景をもつ人同士が共に一つのものを創りあげてこそわかることがあり、本当の意味での成果もそこからし

か生まれもないのかも知れません。今までタイのスタッフの笑顔に何度となく救われたように、私の苦しかった経験もまた一つの刺激として彼らの中で何かしらの変化をもたらしていくんだと。そう考えれば、毎日がとても有意義に思えます。

* * *

「働く」ということは、やったことが形になること。それは喜びでもあり同時に恐怖でもあって、成果物に対する責任を問われることです。単なる自己実現ではなく、何を組織に残せるか、何をホームオーナーたちに残せるかを真剣に考える必要がある。そうやって目指すゴールと限られた資源、時間の中で自分に出来る精一杯をやること。それが働くってことなのかなと思うこの頃です。

そう、何といってもここは実践の場。長期間、途上国のNGOで働けるなんて、私はずっと望んで夢にまでみたこと。学生だからこそトライできるインターンというこの貴重な境遇は、あらゆる可能性に満ちています。だからちょっとやそっとじゃへこたれません。諦めたくない、その意志の力で最前線の道も楽しみながら切り開いていきたいと思えます。

タイに来て3ヶ月、半年間のインターン契機も折り返し地点を迎えました。帰国後ももっと成長した姿をお伝えできるように今日もバンコクで頑張ります！

GVレポート：Youth GV

同じサイトを継続的に訪れることでそのサイトの変化を感じることができるのは、ユースGVの魅力の一つだと思います。実際私も今回2度目の訪問で、建物や道路、植物などの変化に気づき、ハビタットの活動の効果を感じました。今回のワークは主に壁の張替えや外装の塗り直しといったリペアリング(修理)でした。3年以内にリペアリングの必要がでてくるということには、スチールフレームという建築方式の簡素さを感じるとともに、大火災によって多くの家屋を失ったバセコに住居が即急に必要だったということも伺えました。

所属	立命館ユースGVチーム(立命館大学)
訪問先	フィリピン/Great Metro Manila
サイト情報	GMMアフィリエート、BASECO 地区
活動日程	12日間: 2007年2月23日(金)~3月6日(火)
メンバー	計: 9名(大学男性: 4, 大学女性: 5)

チームとホームオーナー(ハビタットハウスの前で)



R&RではSALTとFood for the hungry internationalというNGOを訪れました。それらは最貧困層に位置する人々を対象とした活動を行っているNGOで、ハビタットの活動内では味わえないような体験ができました。しかし、私たちの活動が人の役に立っていると直接感じるのは、GVならではのものだとも思いました。

私たちが泊まったホテルは、マニラにあり近くに大きなショッピングモールのあるきれいな場所でした。バセコは都市にあるスラムなので、ホテルからサイトは30分くらいで移動ができ、貧困と裕福の間を行き来する生活は異様なものでした。

ユースGVに関して、継続的に現地を訪れ、生活環境改善に取り組む若者たちをGVチームがサポートするプログラムの難しさを改めて感じました。3度目ということで、現地の若者と信頼関係が築けてきた反面、お互いの立場に踏み入りすぎたと感じることもありました。また、もっとためになりたいと思うあまりに、自分たちやオフィスのキャパシティを越えた仕事をしようとしてしまったこともありました。どんな関係でどんなことをすればよいのか難しいですが、素晴らしいプログラムだと思うので、今後も取り組んでいきたいと思っています。ありがとうございました。

(立命館ハビタット ユースGV チームリーダー 大西 由訓)

My Habitat: 「ハビ人」集まれ!

7月3日、渋谷にあるレストラン「The Pink Cow」にて、第一回目のハビ人集会(My Habitat主催)が行われました。キャンパスチャプターの学生メンバー、My Habitatメンバー、一般の方々、スタッフなど総勢11名集まり、ハビタットやGVについての情報交換等しながら楽しい時間を過ごしました。



My Habitatは、日本国内でも「ハビタットと何か活動したい」と思い立った元GV参加者数名が立ち上げたサポートグループで、東京を中心に外国人・日本人を問わず楽しく啓発活動や国際協力に興味を持ってもらうため、ハビ人集会をスタートさせました。次回は8月7日(毎月第一火曜日に開催)、午後7時から同じくThe Pink Cowにて。詳細はホームページにてご確認ください。皆様のご参加をお待ちしております。(インターン 太田 歩)

ロックバンド「Monkey Majik」ツアーでハビタット写真展開催中!

テレビドラマやCMの挿入歌でおなじみのロックバンド「Monkey Majik」のライブツアーにて、ハビタット写真展を開催中です。



Monkey Majik >



ハビタットの活動に賛同したメンバーとツアースタッフのご好意で、6月9日(土)より、約1ヶ月をかけ日本全国で行われるライブツアー期間中、それぞれの会場でハビタット写真展が続けられます。

<募金箱と写真の展示(東京)

(広報部)

能登半島地震被災者支援 活動報告

ハビタット・ジャパンは、日本国内で大規模な災害が発生した場合、ボランティアの派遣を中心とした支援活動を行う方針をとっており、3月25日に発生した能登半島地震の際には、第一次隊として3月31日から4月5日までの6日間、職員2名、学生ボランティア2名を、また第二次隊として5月21日、22日の両日、職員1名、米軍三沢基地からのボランティア3名を現地へ派遣し支援活動をおこないました。ここでは第二次隊の活動概要を報告します。

* * *

能登半島地震の被害では土蔵も大きな被害を受けました。土蔵は輪島塗の作業所や酒造工場として使われているところも多く、まちづくりの観点からみても貴重な財産です。ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは、建築家やまちづくりコンサルタントが立ち上げた現地の土蔵修復支援活動実行委員会に協力するため、5月21日と22日、米空軍三沢基地からのアメリカ人ボランティア3名と共に輪島市で活動をおこないました。

現地では実行委員会の水野雅男氏や萩

野紀一郎氏とスタッフの方々とともに作業をおこなったのですが、水野氏も萩野氏も英語が堪能であったため、コーディネーターとしては非常にやりやすかったです。

三沢基地からは、昨年のジミー・カーター・ワークプロジェクト (JCWP) にも参加してくれた Jeremy Huffaker 氏の他に、Joseph Bordonaro 氏と Song W Lee 氏が参加してくれました。ちなみに三沢基地からは車で10時間以上もかかります。ボランティア休暇制度を利用できたということで、基地の人々からも応援してもらったそうです。

今回は鳳至地区にある2階建ての土蔵の一つが対象でした(同じお宅になんと3棟の土蔵がありました)。損壊している土蔵の壁土をハンマーなどで



をハンマーなどで落とし、竹や木材を取り除いて適度な大きさに

砕き、その壁土を土嚢袋に詰めて運搬するというのが作業の主な内容です。壁土は2%ほどの新しい土を混ぜてリサイクルするそうです。

作業は土ほこりが舞う中で行われ、中腰の作業が多いため、かなりの重労働でした。壁土はとても重く、ひとつの土嚢は35kgから40kgになります。これを土蔵から運び出し、一輪車は何袋も乗せて運びます。これまでの海外の建築活動とは全く違った経験になりました。

* * *

輪島ではこの土蔵修復支援活動は注目を浴びており、また外国人ボランティアが来たということで、地元の新聞やテレビなどの取材も受けました。

2日間で土蔵の土壁はほとんど取り払われ、予想していた以上の成果があげられました。三沢基地の3人は自ら進んで厳しい作業に取り組んでくれ、気さくながらも節度ある態度に多くの方が感銘を受けていたようです。コーディネーターである当方からしても、理想的なボランティアチームでした。
(三村 紀美子)

ハビタット・ジャパンでは、この災害の被災者を支援することを目的に、引き続き義援金の受け付けを実施します。寄せられた義援金は、公正、適正に被災者支援のための活動に用いられます。皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。義援金の振込先は以下の通りです。

【郵便口座】

口座番号：00100-2-278431
口座名義：(特活) HFH ジャパン
お振込みの際には、住所、氏名のほか、通信欄に「能登半島地震支援」とお書きください。

【銀行口座】

振込先：三井住友銀行 中野坂上支店
口座：普通 4180738
口座名義：トクヒ)ハビタット フォー ヒューマニティ ジャパン
お振込みが完了しましたら、お名前やご連絡先、利用用途(能登半島地震支援金であること)を事務局までご連絡ください。

【謝辞】

今回の能登半島地震で被災された方々への支援協力を呼びかけたところ、現在までに寄せられたご支援は以下の通りです。本当にありがとうございました。寄せられたご支援は公正、適正に被災者支援のた

めの現地での活動に役立させていただきまます。記して感謝の意を表します。(敬称は略させていただきます。)

【義援金】

3月30日	イエズス会社会司牧センター	50,000円
3月31日	氏名不詳	20,000円
4月2日	伊藤 礼	10,000円
4月2日	施 治安	3,000円
4月2日	奥谷浩一	10,000円
4月4日	名東キリスト・ルーテル教会	20,000円
4月6日	渡久地晴仁	3,000円
4月11日	森嶋伸夫	3,000円
4月17日	小倉幸子	10,000円
4月17日	クリストファー・ルース	10,000円
5月1日	神の家族主イエス・キリスト教会	18,460円
5月17日	京都外国語大学ハビタット	15,872円
6月14日	ADRA JAPAN	480,000円

【物資提供】

4月2日	株式会社コスモスイニシア (コスモスグループ)	二次災害防止用ブルーシート	250枚
------	-------------------------	---------------	------



ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは地域のニーズに基づいたプログラムや個人参加を通して世界中の貧困住宅の撲滅を目指しています。2006年は100以上の国々で、100万人近くのボランティアが参加しました。私たちのエキサイティングな活動に関するさらなる情報をご希望の方はぜひ下記までご連絡ください!

Habitat for Humanity Japan

〒164-0003
東京都中野区東中野1-45-5 Tel: 03-5330-5571
日ノ出ビルB101 Fax: 03-5330-5572
発行人: 安藤 勇 URL: www.HabitatJP.org
編集人: 茂木 周二 Mail: info@HabitatJP.org
同: 中川 ミミ

